勝海舟と駿府

織田三喜彦氏（67期）

幕臣の移住に奔走

静岡市葵区門屋の宝寿院内にある「海舟庵」

門屋の白鳥本家

大久保一翁と共に

海舟が大久保一翁とともに、西郷隆盛と江戸城明け渡しの会談をした慶應四年三月。

以前から西郷は「勝先生の見識に惚れ申した」と云っていた。また海舟も「私より格が上かも知れぬ」と高く評価していた。三月一四日の会談では慶喜公の助命と徳川宗家の存続について、西郷は云い切った。「私が一身にかけてお引き受け申す」。

勝海舟もまた「幕府などはすでに不要のもの」と云い切った。おたがいに固い信頼関係があったから明治維新の夜明けを迎えられたのだろう。

旗本ら一万三千人

さて新政府は徳川家達（田安亀之助）を宗家の当主と認めた。六歳の幼君を駿河国府中城主（七〇万石）に命じた。海舟が尊敬し兄事していた大久保一翁は、後見役として駿府城に入った。

時代はめまぐるしく変わり慶應四年（一八六八）九月八日から明治元年となる。激動の年である。

さてこの後が大さわぎになる。三万騎と云われた旗本のうち、一万三千人が沼津以西駿府にいたる各地に移住したのである。

生計の維持に必死

海舟も鷹匠町に居を移し、禄を失った幕臣たちの受入れに取り組む。私の親戚でも一六坪の離れに旗本一家一二名を迎えたという。五千人とも八千人とも云われる幕臣たちの住居、食糧、薪炭等の手当て、刀をすてた人々の生活をどうするか？　一翁も海舟も必死であったろう。

大久保一翁は伊勢の識者である竹川竹斉と親交があった。竹斉は「茶の栽培、蚕の桑園」について原稿を書き、一翁がこれを出版していた。

金谷原（牧の原）は水利は悪いがお茶なら水がなくてもいいか？と海舟は考えた。各村の名主たちは郷倉の米を提供したようで、私の家にも明治二年二月に米三〇俵を差し出した書類があった。

刀を鍬に持ち替え

しかし資金がない。明治二年、海舟は時の総理格の三条実美の許可を得て、旧大名家から四〇万両余の金と米五百俵の助成を受けた。水戸徳川家からも七〇万両を借り受けた。こうして約三百世帯ともいわれる幕臣たち、荻野介左衛門（38期の故荻野健氏宅か）と会う。安倍流域の各村の総代名主の白鳥惣左衛門とも出会うのである。

この出会いについては白鳥本家の先代で先年逝去された故白鳥知（さとる）氏（50期）の貴重な遺稿＝**別掲**＝がある。

故白鳥知氏（50期）遺稿に詳述

明治初期　門屋の人々と交流

「勝海舟と門屋」

白鳥　知氏　平成10年記

明治二年初夏のころ、安倍街道の茶店では、今日も街道を行き来する馬力挽きや大八車に荷を積んだ人たちが、汗を拭きながらひと息ついていた。

茶をすするもの、メンパ飯をとり出し、お茶をもらって食事する者、茶碗酒を楽しむもの等……。

世間話はもっぱら、つい先頃江戸から移って来た旧幕臣、いわゆるお泊りさんの動静である。

店の一隅で声高に店の店主と話していた白鳥惣左衛門の話も、やはり政談で、熱が入る程に、徳川の幕臣が一戦も交えず落ちのびて来ただらしなさが、面白くもねエと云っただろうかと噂は噂を呼んで一層不安を募らせていた。

江戸から駿府へ移住した幕臣は、五千人とも八千人とも言われ、家族や小ものを含めれば大変は数になり、混乱が続いていた。

ある者は食いつめて野盗となり、ある者はなれない手に算盤を持ち、町で職に就けない者は金谷原（牧の原）や富士山へ開拓者として出て行った。人口が急増したため、米麦、薪炭などの生活物資が底をつき、駿府の町中は恐慌状態に陥っていた。

このような緊急事態を収拾するため、駿府藩の中老・大久保忠寛（一翁）や幹事役の勝安芳（海舟）、山岡鉄太郎（鉄舟）ら藩の幹部は連日策を練り、町頭の萩原鶴夫や小鹿村の学者・出島竹斉らの意見に耳を傾け、町中の商人や在郷の地主たちに協力を求めていた。

茶代を置いて立ち去った武士の後ろ姿に村人たちは「どの人だろう」とささやき合っていた。―中略―

数日後名主の惣左衛門の話で、あの武士が勝安房守安芳ではないかという。

徳川幕府が瓦解し、明治の御一新を迎えたとはいえ、幕府最後の陸軍総裁であり、江戸城開城の立役者として、西郷隆盛の名と共に、庶民の耳にも聞こえていた。

あの日、海舟の耳に自分たちの放談が聞こえていたことははっきりしている。

惣左衛門は早速鷹匠町の勝邸を訪ね、先日の無礼を詫び金谷原の開墾を願い出た。

白鳥家との出会い

さて海舟は江戸ッ子らしいべらんめえ調で話をしていたようだが、日々の行動を克明な日記に残している。

明治二年五月九日、四七歳の海舟は牛妻のあたりまで歩き、荻野介左衛門（38期の故荻野健氏宅か）と会う。安倍流域の各村の総代名主の白鳥惣左衛門とも出会うのである。

この出会いについては白鳥本家の先代で先年逝去された故白鳥知（さとる）氏（50期）海舟の人となりや時代の流れが彷彿とする名文と感ずるので紹介する。

山行を楽しむ織田三喜彦氏

なお知氏は静岡市助役や静岡第一テレビ常勤監査役等を歴任された円満な人格者であった。

家康ゆかりの旧家

因みに私の父喬（たかし＝37期）は知氏と従兄。水落町に分家した白鳥健治の二男で、私の母の婿養子となった。私にとって祖父の健治は本家白鳥惣平の三男であり、惣平の父が海舟と交友のあった惣左衛門である。白鳥家は慶長年間に家康公から備前長船の銘刀を賜った、由緒ある旧家である。

現当主は滋久氏（84期、日本航空・機長）である。

海舟の子孫や一翁の家は？

お願いと御礼

白鳥家に残る海舟日記によると、彼が兄事した大久保一翁が、明治四年春小鹿村に家を建てた――とある。一翁は海舟同様に西郷隆盛が高く評価した幕臣です。のちに初代東京知事になる人物の家がどこにあったのか？　併せて海舟のご子孫の消息についても、ご存知の方、ご一報下されば幸いです。また拙稿について同窓諸兄の御高評いただければ誠に幸いに存じます。

資料ご提供いただいた白鳥家、美奈子様に心から感謝し、諸霊のご冥福をお祈りします。

時代考証につきましては〝勝海舟を動かした男・大久保一翁〟――の著者である古川愛哲氏のご指導をいただきました。御礼申し上げます。

海舟について調べるうちに、引きつづき書きたいな……と思うようになりました。

一翁や海舟さらに西郷等百年に一人くらいしか出ない人物の魅力でしょうか？　こんな人達が現代（いま）の政界にいたらいいのに……としみじみ感じました。

参考文献　▽「白鳥家文書」―「日本の歴史」中央公論社、二〇巻「明治維新」他▽「勝海舟を動かした男―大久保一翁」グラフ社、古川愛哲著。

（67期　織田三喜彦＝同窓会常任理事）

織田三喜彦氏の略歴　静岡市葵区有永生まれ。静岡法経短大中退。郵便局長を経て静岡市議三期。郷土史等、歴史研究に意を注いでいる。